

石川県の民家調査

建造物研究室・平城宮跡発掘調査部

1970年度の民家調査を石川県下で実施した。この調査は1966年から、各府県が国庫補助をうけて実施している民家緊急調査の一環をなすものである。

調査は第1～3次にわたって行なった。第1次(300棟)は各市町村教育委員会が、第2次(86棟)・第3次(14棟)は当研究所が調査に当たった。主任調査員に伊藤建造物室長、調査員に沢村・細見・宮沢・宮本・村上の5名が委嘱された。

石川県は北半の能登半島と南半の加賀地方からなる。民家についても、この両地方で全く異なった様相を示し、「能登型」と「加賀型」に区分できる。構造形式からみると、能登型は入母屋・平入りで、梁間が大きいため、地梁の上に束を立て、上屋梁を狭く(2間半～4間)して合掌を組む方法をとる。これに対し、加賀型は切妻・妻入りを基本とする広間型で、架構は平行方向に梁を掛けた上に梁行の梁を配り、さらに上屋梁を重ねている。間取りの相異から以下に述べるように、能登型は3つの型；加賀型は2つの型に分類できる。

能登Ⅰ型　奥能登地方(輪島市・珠洲市・穴水町・柳田村)に分布する。間取りはチャノマ(広間、報恩講などの仏事、神事に使用)を中心に、表側と上手に鍵座敷を構成し、ナンド(寝間)、ダイドコロ(居間、食堂)、リョウノマ(またはジョノマ、主婦の仕事場、配膳室)などの常の生活の場を全て背面に配置している。この型で最も完成した形式を示す例は柳田村の西尾修蔵氏住宅(第2図1)である。文化7年(1810墨書)に建設され、年代の明らかな点においても基準例となる。これより古い例として、珠洲市の黒丸長次氏住宅(第1図、第2図2)は17世紀を降らず、県下で最も古い民家である。当初の間取りは表側に座敷3室を並列させ、上手奥に2室の寝間をとり、西尾氏住宅と平面構成をやや異にしている。これは仮間が独立して、鍵座敷を構成する前の平面形式を伝えるものと思われる。

能登Ⅱ型　能登半島の西側に多く分布する。間取りは広間(ヒロマ、オエ、チャノマ)を中心として、上手に座敷(デエ)を2室、背面に2つの小部屋(ナンド、カッテ)を配り、土間側にカッテを張り出している。中島町の座主正盛氏住宅(第2図3)は様式より、18世紀前期の建設と思われ、この地方では比較的古く、ナンドは全く閉鎖的である。

能登Ⅲ型　七尾市・田鶴浜町・鳥屋町・志賀町など、能登半島中部地方に分布する。Ⅱ型と同様に広間を中心とした間取りである(第2図4)。ナン

第1図 黒丸長次氏住宅

第2図 石川県民家平面図 1 柳田村 西尾修蔵氏住宅（復原 文化7年） 2 珠洲市
 黒丸長次氏住宅（復原 17世紀） 3 中島町 座主正盛氏住宅（復原 18世紀前期） 4 田鶴
 浜町 南出昌一氏住宅（現状 18世紀末） 5 金沢市 江戸村田高田氏住宅（現状 18世紀前期）
 6 野々市町 喜多直次氏住宅（現状 19世紀初） 縮尺 1/1500

ドとカッテがもと1室の4間取りであった例があり、また、4間取りのものも若干併存していることから、この平面型を4間取りの発展形とみることもできる。

加賀Ⅰ型 加賀地方全域に広く分布する。妻入りで、表側の梁間いっぱいに土間と広間（オエ、ヒロマ）をとり、奥は座敷（ディ）と寝間（ナンド）に2分する（第2図5）。規模の大きなものにはオエを棟通りで2分し、奥の部屋を4～5室とするものがある。

加賀Ⅱ型 平入りで、広間を仕切って背面に小室（コーマエ、カッテ）をつくる。高松町・宇ノ気町・津幡町の旧国境地方に分布し、加賀Ⅰ型と能登型の中間的な性格を備えている。しかし、調査した限りでは全て19世紀中頃のもので新らしい。

町屋 通り庭をもち、ニワに面して表側からミセ、オエ、ナンド（または座敷等）の順に並べ、オエとニワの一体化した架構をみせている。喜多直次氏住宅（第2図6）のように、大きな家では上手にさらに部屋を加えている。

以上は県下の民家を主に間取りと構造の違いによって分類を試みた結果である。この分類を北陸地方全体のなかでみると、平面では加賀Ⅰ型は福井県北部と富山県山間部に、能登型は富山県平野部に、加賀Ⅱ型は富山県の山間部と平野部の中間地帯に分布するものと類似している。すなわち、北陸地方の民家は南部の山岳地帯を中心に分布するものと、北部の越中平野および能登半島に分布するものとで大きく傾向が変り、その接点にあたる地域では、両者の中間的な間取りをもった民家が存在すると云える。なお、能登地方には古い民家が比較的多く残され、民家の変遷を系統的にとらえることが可能であり、今後さらに精査を重ねる必要があろう。

（宮本長二郎）